樽水の祭り

昭和十八年四月十五日　西浦町第一高等小学校前（後の旧西浦北小学校）

津島神社

　樽水のお祭りは津島神社の例祭として行われる。津島神社は樽水町四丁目七十八番地に鎮座し、御祭神は素盞嗚尊、奇稲田姫命で末社として金毘羅社、御鍬社、猿田彦社、熱田社、武神社、塞神社、稲荷社、知立社、竜神社、山神社、天神社、御葭社、秋葉社が合祀されている。例祭日は四月十五日（現第二日曜日）恒例祭式は年五回、由緒として、創建は明らかでないが、記録によれば元和二年（一六一六年）再建とあり、尾張志には「牛頭天王の社　樽水村にあり」とある。明治五年村社に列格し、同四十年十月二十六日、指定社となる。

津島神社、本殿脇には多くの社

御由緒、神楽船云々とある

本宮祠

本宮山にある神社で、社伝によれば、文政十年（一八二七年）樽水村住人澤田勘四郎三河国砥鹿神社より勧請した。

樽水青年団

樽水の青年団は西浦町第一支団である。戦前旧制の学校制度においては尋常高等小学校二年の年、又、戦後においては中学三年の年に家業に従いながら入団し、年長者の指導を受けながら、一人前になる為の社会教育を受けるとされた。樽水のお祭りは青年団により運営され行われる。樽水では学校卒業前の十二月ともなると、会所（字公会堂）に呼ばれ、新入りとして祭り囃子の習得をした。一月の旧正月頃には上の者より盃を渡され酒を注がれ、「これで入団だぞ」と声を掛けられた。笛、小太鼓、大太鼓のうち希望を言って選ぶことが出来たが、半数は笛と体の大きな者は大太鼓となった。新入りとして会所の準備、お茶を沸かし、茶菓子を通い帳で買出し、火鉢の炭を起こして先輩の来るのを待った。挨拶や礼儀を教わり、稽古の間は休憩の声が掛かるまで正座を崩さず、失礼や失敗があると割り木で頭を叩かれもした。戦前では満二十歳、戦後は初厄（数えの二十五歳）まで努め最年長の年に団長、一級下が副団長、囃子の統括として神祭組長、又、笛、小太鼓、大太鼓の統括や会計が選ばれ、同級の者も含めこれらの者を幹部と呼んだ。お祭りの他に夏の盆踊りの運営も任された。又、昭和五年の本宮山航空灯台の設置の折には西浦町各青年団による花火上げが実施され、お祝いの時の花火上げも青年団の仕事であった。戦時中は兵隊送り、兵隊迎え（遺骨迎え含む）の役割を担った。戦後は村での楽しみとして素人芝居や演芸会を催したりした。芝居はチャンバラや股旅物が十八番だったという。青年団対抗の角力も盛んで郡大会へも参加した。青年団を退団した後は消防団へと入団していった。

公会堂に飾られる本宮山航空燈台

樽水のお祭り

樽水の例祭は一月一日の元旦祭（津島神社）、一月一日か二日（禰宜さんの都合により）の厄才勇み、一月十五日の旧正月には本宮神社の元旦祭、二月十一日の祈年祭、四月十五日の例年祭（お祭り）、五月一日の本宮さん、六月十五日（農上がり）の農神祭、十月十七日の神嘗祭、十一月二十三日の新嘗祭などがあって、その時青年団により勇みが出た。戦前においては一月一日を元日節、二月十一日を紀元節、四月二十九日を天長節、十一月三日を明治節としてこれを四大節と呼び子供達は学校で式典を行い神社で参拝した。紅白饅頭が配られ勇みが出た。朝十時頃より会所を出発し高張り提灯を先頭に二人担ぎの大太鼓、笛、小太鼓の行列で神社へと道行きし勇みを奉納した。厄才勇みの日は厄才の家各戸に角付けとお神楽の打ち込みをして厄才幹事宅では大ご馳走でもてなされた。

四月十五日のお祭りに向け、青年団として様々な活動を行う。

十二月より“お宮囃子”（勇み）と呼ぶ、お宮さんで行う囃子の稽古を一月の十四日まで毎晩行い、笛の者は年長者のお宅へ伺い稽古をつけてもらった。一月十五日には本宮神社の大祭でお囃子を奉納した。

一月十六日より“車囃子”と呼ぶ、お車の囃子の稽古が始まる。稽古の合間に役割や、村への届け出、駐在への道路使用許可届などが行われる。稽古が終わってからはお祭りに使う道具や御幣などを作った。女子青年団員もお車の各所に飾られる花作りで障子紙をインキ等で赤く染め五枚重ねた物を環状ヨリにしたコヨリで束ねた花を数多く作った。お車の輪はひび割れを防ぐ為、用水池や樽水川、浜などに埋められており団長の指示の元掘り出される。お祭りの二、三日前には道中で唄う伊勢音頭や春唄、破レ唄の練習が行われる。

四月十三日はお車の組上げで、上松にあった会所（公会堂）に収めてあるお車の部材を組上げ、女子青年も飾り付けを手伝った。お車には重心が下に来る様に長石を三つ位入れた。組上がると長助山へ運んでおく。（この辺りが開ける以前は砦山の麓の広場で組上げた。）同時に道検分を行い、曳行経路の確認と道直しが行われる。祭りの役割は青年団の中でも囃子の稽古を修めた“神祭組”と住み込みや仕事の関係で稽古には来れないが、祭り当日には参加できる“お祭り青年”とに分けられる。神祭組は囃し方としてお車の運行や勇みに供する。お祭り青年は、新入りは小間使いや高張り提灯持ち、大太鼓担ぎ、御幣振り、三方を持っての塩蒔き、二年目は、電線上げ、輪の歯止め役、又、三年目、四年目には梶方として元気の良い連中が選ばれ、道中唄を歌いながら花形として派手たという。神祭部長は運行の拍子木を叩き、幹部はお車の四方で手提げ提灯を持つ。団員は白シャツに白ズボンにドンブリと呼ぶ腹掛けをして、女友達

よりもらった色取り取りの帯締めをタスキ掛けし、リリアン編みのお守りを下げる、そして頭や首に黄色の鉢巻をする。幹部連はそれに羽織を着た。

四月十四日は曳き初めで早朝より幕を飾り、曳き初めの準備を幹部が行い、同時に午前中にお車が通ることが出来ない地区に太鼓を担いで行き“お神楽廻り”を行う。神祭組長以下各戸に角付けをし、お神楽を披露し、御札と御洗米、御神酒を配り伊勢音頭を唄いながら祝いこみ、祝儀を頂いた。午後より曳き初めとなる。お神楽廻りはお車の先達となって各戸に角付けをしながら進んで行く。お車は長助山から滝田織布へと向かい、南進して古川医院の前より西へと向かう。樽水橋で晩ゲとなり提灯を付け灯がとぼされる。北へと進路を変え青物市場へ到着すると上山（天蓋）を外し、市場の中へ収めて置く。

四月十五日が本宮となり、午前九時に津島神社へ向かう。神事が執り行われ、それが済むと西浦町第一高等小学校（後の旧西浦北小学校）の校庭に入る。そこへ西阿野の山車も入って来て、記念撮影となる。提灯もここで取り付けられる。樽水と西阿野の団長同士で樽水のお車は唐崎川まで、西阿野の山車は新居坂までの取り決めがされ、お互いの地区への角付け（祝儀集め）が了解され、各々向かってゆく。取り決めは在ったものの、当時は警察へ届出した道路使用許可もあって無いようなもので、北へ南へ足を伸ばし、北は市場のキネマ、保示の仕出し屋藤八サ、南は古場の酒屋へと祝儀を集めた。保示の東和通りはまさに走り参宮そのものだったと言う。又、他地区では喧嘩する事もあったと言う。樽水のお祭りは酒祭りで、道を通る人毎に酒を振舞い、果ては弘法参りのバスをお車で通せんボして乗客のみならず、運転手にまで酒を振舞ったと言う。又、戦後物資不足でお酒の無い時は、どぶろく（密造酒）、メチル（合成酒）でも気勢を上げ、古川医院に担ぎ込まれた。大体夜八時位には会所へと戻った。

腹掛けの胸の部分には“囃”の文字

昭和三十一年の祭り

次の日は山おろしで片付けと慰労会が行なわれた。片付けが済むとお車に飾ってあった花を肩にして近所の写真スタジオで同級生や幹部連で記念撮影を取るった。続いて本宮山へ参拝し、そのまま北の半田板山へ娘遊びに向かった。樽水と板山は隣村で古くから交流があり、板山から樽水へ嫁いだ所も多くあった。板山へ祭り装束のまま行き、黄色い鉢巻を見ると「樽水の若衆が来てくれた。」と座敷に上げられて大ご馳走で歓待され、年頃の娘に接待され、そのまま泊まって行き、あくる朝牛車で送ってもらうようなこともあったと言う。三十年頃になると、慰労として電車に乗り、犬山城下の河原で宴会をする形へと変遷した。

写真館で撮影された記念写真
（中にはブロマイド風のものも）

昭和三十八年、昭和三十九年

昭和四十年　西北小が鉄筋コンクリートに

昭和四十年代になると行事も色々と縮小、簡略化されお車の曳き廻しも中止となり青年団も入団者が高校進学等で減少し、自然消滅していった。五十年頃より区の主催により例年祭では公会堂において芸能大会が開かれるようになった。これは大須演芸場の芸人を招いて行うもので、同時に厄才による餅投げ、婦人会の炊き出しが行われる。六十三年より囃子の奉納、披露、子供達への伝承、お神楽廻りも順次復活し、樽水お囃子保存会が組織された。平成六年には大太鼓を積んだ囃子車が製作され、法被も新調した。お祭りだけでなく毎年三月の常滑市伝統芸能囃子発表会への参加や各方面での囃子の披露等、積極的な活動を行っている。

復活したお神楽廻りと樽水お囃子保存会

お囃子の披露と餅投げ

お神楽廻り

製作された法被

二基の囃子車

地区敬老会、常滑市伝統芸能囃子発表会などへも参加

樽水の囃子

“お宮囃子”（勇みの曲）は曲の長さ、早さ、難易度により『小囃子』と『大囃子』に分けられ『小囃子』には「岡崎」（おかざき）「三番叟」（さんばそう）「神囃子」（しんばやし）「トチハラ」（土地祓い）「十六囃子」（じゅうろくばやし）「ドヤ打ち」（どやうち）「神前神楽」（しんぜんかぐら）「矢車」（やぐるま）「竹雀」（たけす）「十日戎」（とおかえびす）「坂下り」（さかくだり）『大囃子』には『小囃子』の内の「岡崎」「三番叟」「神囃子」「トチハラ」「十六囃子」の各曲をそれぞれゆっくりとした曲調にした五曲と「道行」（みちゆき）「坂上がり」（さかあがり）があった。「岡崎」「三番叟」「神囃子」「トチハラ」の四曲の『大囃子』は戦前消滅した。祭りでは勇みの道行きとして神社に向かうには、会所を出る時「道行」で出発し途中で（大囃子の）「十六囃子」に切り替える。神社の階段の手前で「坂上がり」に切り替える。間々に「竹雀」「十日戎」を入れる。本殿の前まで来ると『五つ』（いつつ）と呼ぶ「岡崎」「三番叟」「神囃子」「トチハラ」「十六囃子小囃子」の五曲を連曲で行い、続けて『三つ』（みっつ）と呼ぶ「ドヤ打ち」「神前神楽」「矢車」の三曲を連曲で行う。神事が執り行われ、降神になると「打ち込み」（うちこみ）を演奏する。この曲は〆めの曲として最後に行うもので御車でも同じ。神社の坂を下りて会所に戻るのに「坂下り」を使い、会所まで戻ると最後に「打ち込み」を行う。

“車囃子”（お車の曲）は太笛（能管）を使う曲が四曲あり、「柷豆志」（きずし）、「法船」（ほうせん）、「二つ一」（ふたついち）、角を曲がる時の「車切り」（しゃぎり）。細笛を用いるのは七曲で、梶方が華の時「祇園囃子」（ぎおんばやし）、走る時や上り坂、勢い付けの時は「雷」（かみなり）、ゆっくりとなった時の「早船」（はやふね）、道中での「早神楽」（はやかぐら）「六方」（ろっぽう）、角付けでの「お神楽」、それをゆったりとした「大神楽」（だいかぐら）などがありこれらは笛師が状況をみながら順次切り替えて行く。「早神楽」「大神楽」は元々は太笛だと言う。勇みの「竹雀」を吹くこともあった。囃子を覚えるのに用いる笛、太鼓の譜面が在ったと言うが現在は不明である。囃子は当地の若衆が常滑や半田の稽古を暗闇の中、盗み聞き覚えたものだと云う。

“余興曲”には「ノーエ節」「数え歌」の二曲がある。軍歌など笛で吹く者もあったが樽水の囃子ではないときつく戒められた。

笛は能管と篠笛（太間尺）を用い、以前は熱田の菊田雅楽器店にて購入、修繕。近年は桧原区の方の斡旋にて購入。子供達の練習用の笛は塩ビ管で常滑の牧野管工にて製作された物。小太鼓は白皮の物でバチは勇みの曲には細い物を使うのが本来だと言う。半切り大太鼓は二基。長胴大太鼓は胴内部に“慶応三年～”との文字がある。平成六年に皮の張替えが行われた。

お囃子道具

太笛（能管）細笛（篠笛）、二基の半切り大太鼓

長胴大太鼓、白皮の小太鼓

長胴大太鼓の胴内の文字

皆慶應三丁卯仲秋上旬　尾州名古屋押切住　御用御太鼓所　平野小市郎重成為

飾り提灯

樽水のお車

津島神社の御由緒の立て札には“～其ノ昔海部郡津島天王社ヨリ勧請セシモノト推定サレ天王祠ト唱エ牛頭天王社トモ唱エタリ　病疫祓除ノ神トシテ氏子ノ崇拝厚ク陰暦六月十五日大祭ニハ徳川時代ヨリ傳統的ニ海上ニ神楽船ヲ浮ベ盛大に執行サレタリト言フ～”とあり元々は津島天王祭りの夏祭りに出る川舟を模したお祭りであったと伝えられる。いつの頃よりお車になったのかは不明であるが、明治、大正年間においては上げに一台、新居に一台と樽水には二台のお車があり、新居のお車は船型だったと言う話や、一台は男子青年で、もう一台は女子青年で曳くお祭りだったと言う話が伝えられている。船祭りが陸へ上がった例であり、二基残されている半切り太鼓がそれを実証している。昭和の初め頃より上山のない花車に変わり、上部には日本尊命（ヤマトタケルノミコト）や大国主命（オオクニヌシノミコト）などの張子の人形を製作し人形山として曳き回した。シナ事変（昭和十二年）の頃に知多型を模したお車が製作され昭和四十年代まで曳かれた。地元の大工の製作と云われ毎年々々柱を変えたり修理をしたり、字より予算をもらって維持してきた。青年団が消滅し、公会堂の移転の折お車は処分されてしまったが、堂山の柱は盆踊りに使う櫓として残され近年まで使用された。現在お車の再建の話が持ち上がってきている。

公会堂にある額　昭和二十二年

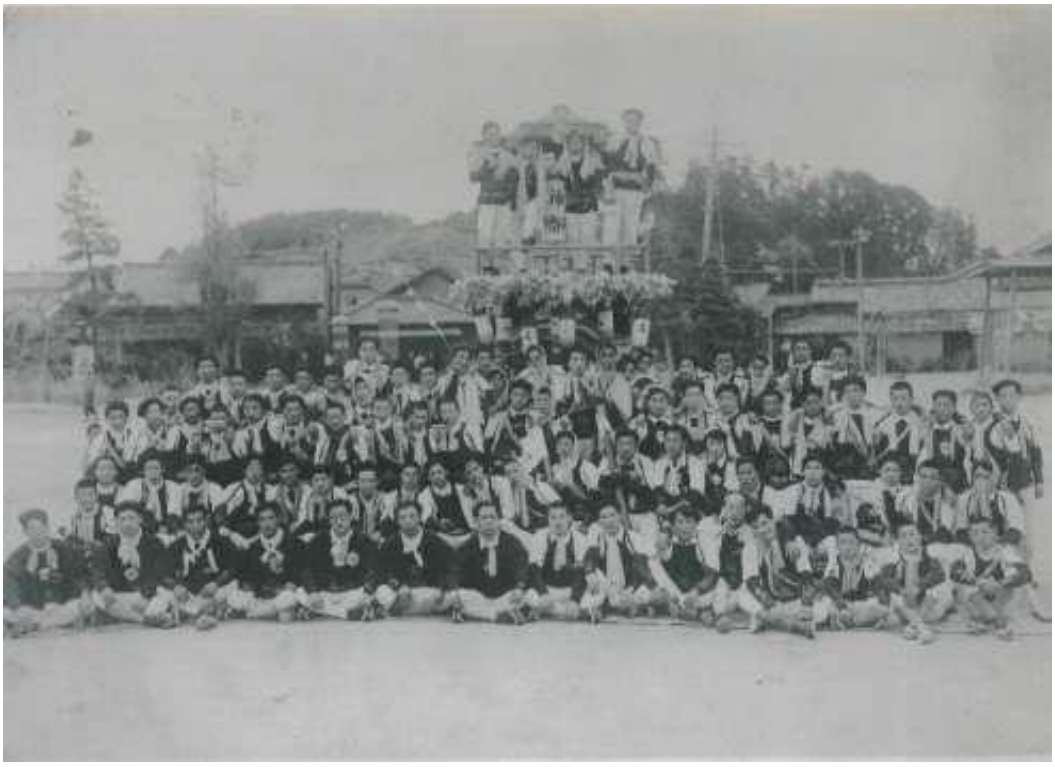
祭り集合写真

昭和十八年

昭和十九年

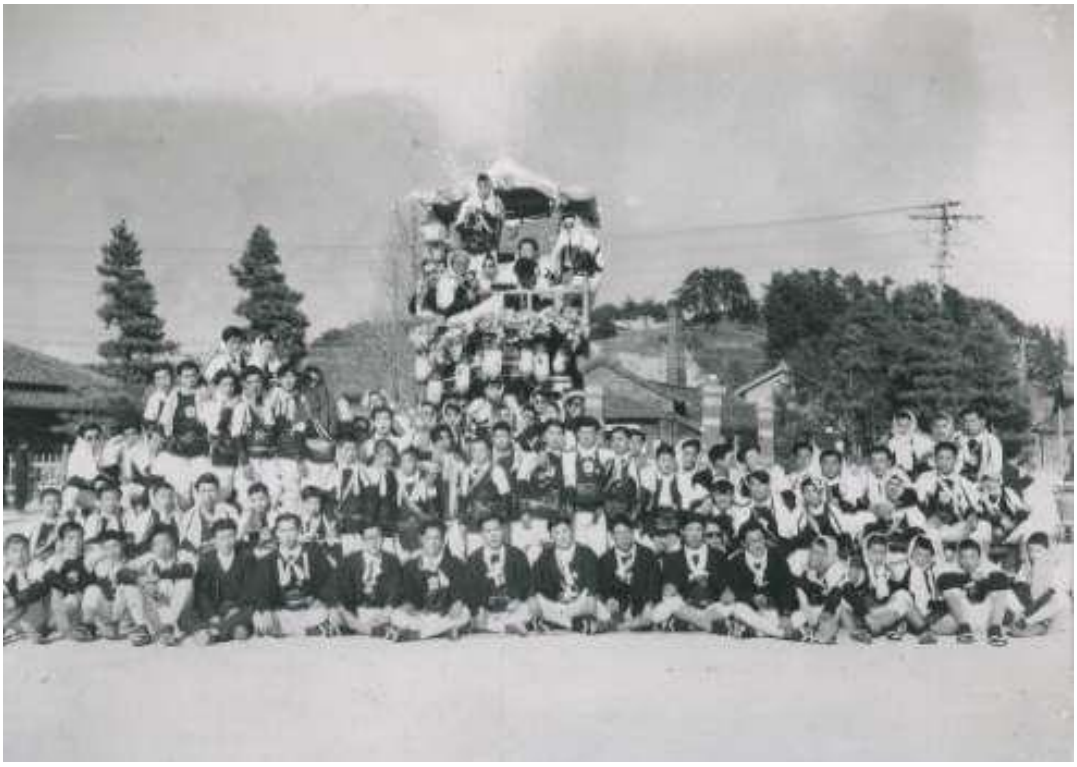
昭和二十一年（前年は中止）

昭和二十二年



昭和二十三年

昭和二十三年



昭和二十四年

昭和二十五年

昭和二十五年

昭和二十五年

昭和二十六年

昭和二十六年

昭和二十八年

昭和三十一年

昭和三十二年

昭和三十三年

参考（津島天王祭り、神楽船、船山車、人形山について）

津島神社は尾張天王社と呼ばれ信仰とともに各地で天王祭りを模した祭りが行れた。知多各地でも多数見られたが、今でも笹神楽など名残が見受けられる。

津島天王祭り宵祭り

朝祭りの車楽

尾張地方には今でも天王祭りを模した川祭りが執り行われる。又、山車の上に巻き藁提灯で飾った形態の山車も多数分布している。

蟹江川須成祭り

一宮黒岩の山車

知多地方でも幾つか神楽舟が現存し、（他に内海西端にも一艘）他には知多市新舞子（松原村）の山車や河和神武祭の夜山にも上山に巻き藁提灯が飾られる。

上半田ちんとろ祭り

大野の権丸

松原村の山車　　河和の夜山

樽水には船山車の伝承が残っているが、東海地方における船山車について尾張、美濃地区に数台、南勢地方に鯨船車が数台曳き回されている。

犬山の浦島　　元・末広町「黒船車」現・美濃「舟山車」

岐阜八百津の山車　　富田の鯨船

知多地方においては常滑市市場区では明治以前に名古屋名道町（巾下）より柴舟車と呼んだ船山車を購入し芸者衆の顔見世に使われた。その後多屋に譲渡され昭和三十年頃まで曳かれた。小野浦や豊浜でも千石船型の船山車が曳かれていて小野浦の東組と南知多町民俗博物館に豊浜半月のものが現存している。又、篠島のぎおん祭りに曳く船山車が最近新造された。

小野浦東八幡車

又、富貴市場の山車、天王丸は上山に船が乗る特殊な形をしている。（明治から大正にかけての改造による。）以前は船山車だったからだと言う。天王丸の船は常滑大工利右衛門と太蔵が，台を上野間の丈助により作られたとなっていて樽水の船山車はこのような形であったのかもしれない。同じ西浦の苅屋においてもかつては船山車を所有し曳き回していたと言う。

富貴市場天王丸

上山の船

樽水で昭和初期頃曳かれていたと言う花車は、知多地方各地で見られ近世山車購入以前は花車で行う地区も多かった。

近年復活した多屋の人形山

旧常の花車

※ 参考以下の画像等については無断転載を禁止致します。

協力　樽水区
田中克典氏（十四年区長）　加藤克平氏（顧問　十三年区長）
幾世康裕氏（十四年副区長）　鯉江豊氏（氏子長）
竹内嘉彦氏（十四年会計）　加藤久豊氏（区相談役）
写真スタヂオ和光

伝承　中野半三氏　大西文夫氏　磯村章氏　久田光男氏
樽水囃子保存会

発行　常滑市祭り推進委員会

調査　平成十四年二月～三月　樽水区公会堂
常滑市祭り推進委員会　伝承保存部会
加藤国男　赤井孝彰　石井豊己　伊奈秀和　大北徹　鯉江健彦
酒井順　澤田真宏　富本和伸　永柳輝高　深谷佳宏
山崎稔幸（文責）